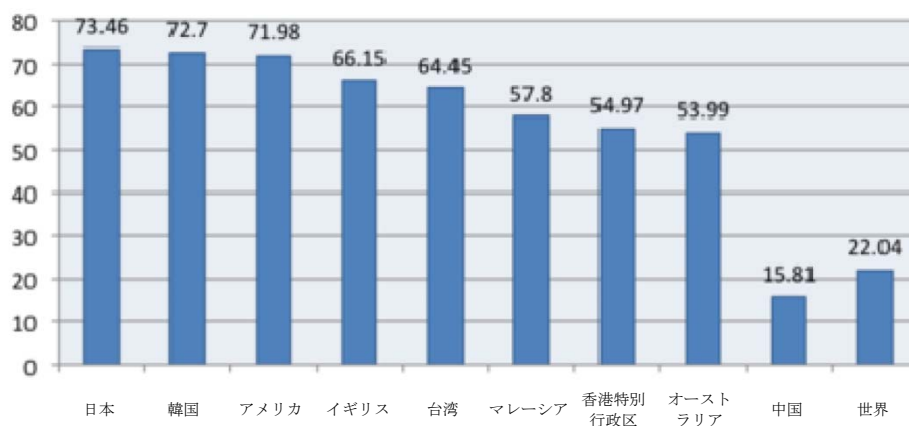


コミュニケーションとインターネット文化 チョウ・プエイクエン (マレーシア)

インターネットの接続が 1990 年に開始され、その後、1995 年からマレーシアでは広く利用されるようになりました。マレーシア通信・マルチメディア委員会 (MCMC) のデータによると、2008 年、マレーシアのインターネットの普及率 (住民 100 人ごと) は、ASEAN 諸国の中で、シンガポールに次ぎ 2 番目でした。マレーシアのインターネットの普及率は、日本、韓国、アメリカといった他の先進国ほどまだ高くはありませんが、世界の普及率が 22.04% (グラフ 1) であることと比較すると、まずまずと言えるのではないのでしょうか。インターネットの利用者数は、下の表 1 が示すように、年々増加しています。国際電気通信連合によると、2009 年の 6 月の時点で、インターネットの利用者は約 16,902,600 名でした。この数字はマレーシアの人口の 64.6% に相当します。マレーシア女性・家族・社会開発相を務めるダト・セリ・シャリザット・ジャリル氏によると、MCMC の調査では、2010 年のインターネットの普及率は、2,860 万の人口の内の 60% であり、2015 年までに 70% に上昇すると見られているとのことです。(ボーナー・ポスト・オンライン、2011 年 10 月 12 日(水)のニュース)

特定国におけるインターネットの利用者

マレーシア通信・マルチメディア委員会より (Q1, 2008)



グラフ 1: 特定国におけるインターネットの普及率

(出典: <http://com215.wetpaint.com/page/Malaysia+Internet+Penetration>)

表 1: マレーシアにおけるインターネット利用と人口の増加

年	インターネット 利用者	人口	%	出典
2000	3,700,000	24,645,600	15.0	ITU
2005	10,040,000	26,500,699	37.9	C.I. Almanac
2006	11,016,000	28,294,120	38.9	ITU
2007	13,528,200	28,294,120	47.8	MCMC
2008	15,868,000	25,274,133	62.8	MCMC
2009	16,902,600	25,715,819	65.7	ITU
2010	16,902,600	26,160,256	64.6	ITU

ITU : 国際電気通信連合

C.I. Almanac : コンピュータ産業年鑑社

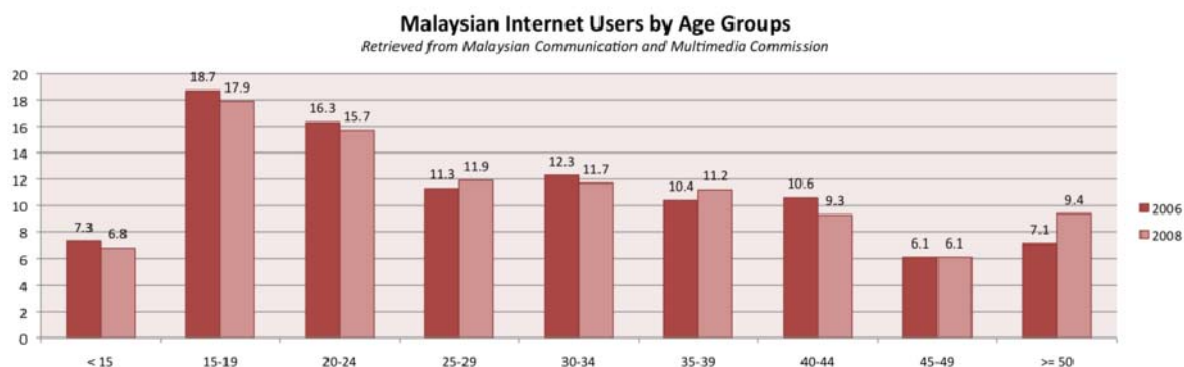
MCMC : マレーシア通信・マルチメディア委員会

(出典: <http://www.internetworldstats.com/asia/my.htm>)

利用者の年齢層については、グラフ 2 が示すように、大半は 15 歳から 19 歳です。つまり、マレーシアでは、ほとんどの場合、高等学校に入ってからインターネットを使い始めるのです。インターネットを日々の生活に取り入れる人が増えており、利用者にとってのインターネットの重要度を MCMC が調査しました。「2009 年インターネット家庭利用調査」によると、調査対象者の 28% がインターネットは自身の生活にとって「非常に重要」と考えており、51% が「重要」と考えていました。(グラフ 3)。

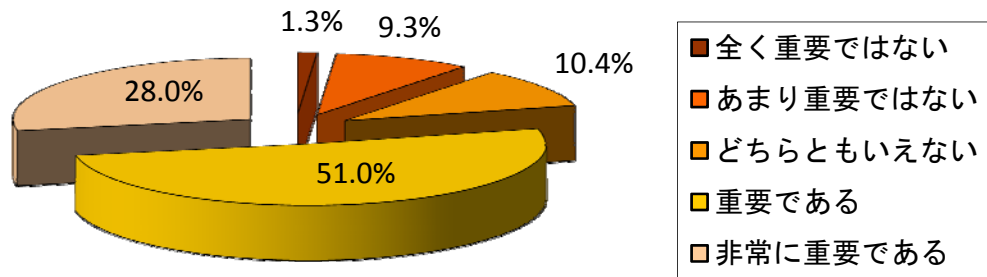
マレーシアの年齢層別インターネット利用者

マレーシア通信・マルチメディア委員会より



グラフ 2: マレーシアの年齢層別インターネット利用者

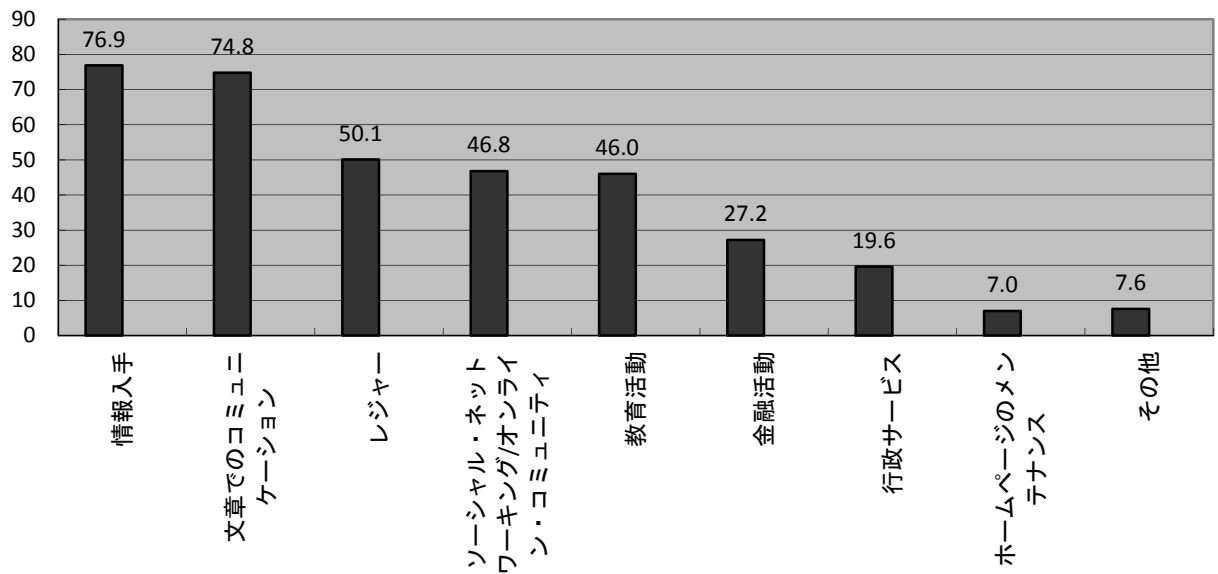
(出典: <http://comm215.wetpaint.com/page/Malaysia+Internet+Penetration>)



グラフ 3: 利用者にとってのインターネットの重要度

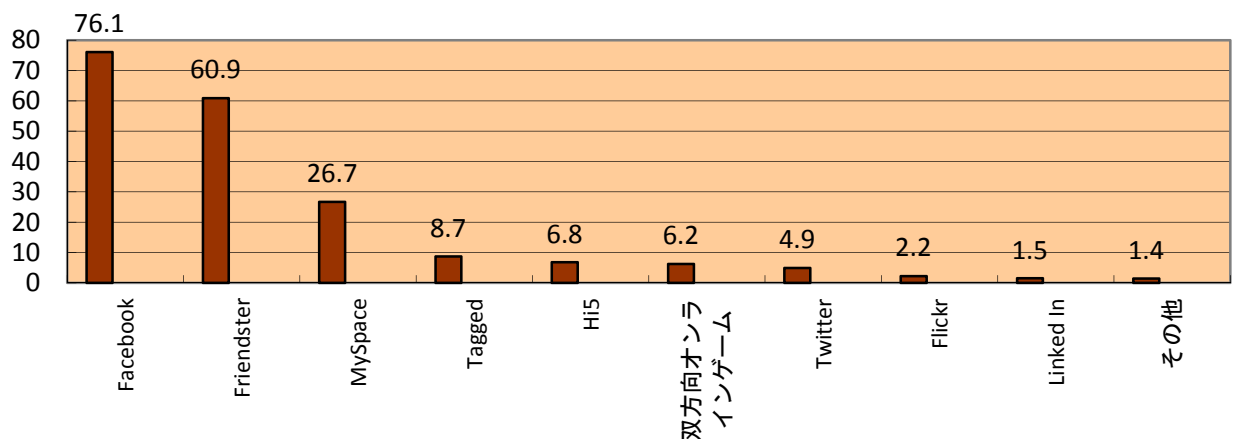
(出典: <http://www.apira.org/data/upload/MicrosoftPowerPoint-HUIS2009Presentationat7thAPIRA>)

下のグラフ 4 はインターネットを利用する目的を示したものです。あらゆる目的の中で、利用者の 74.8% はインターネットを文章でのコミュニケーションのために利用し、一方、46.8% はインターネットをソーシャルネットワーキングやオンラインコミュニティのために利用します。「文章でのコミュニケーション」には、電子メールの利用や、Windows Live メッセンジャー（ウィンドウズ・ライブ・メッセンジャー）や Yahoo Messenger（ヤフーメッセンジャー）などのプログラムを使ったインスタントメッセージでのチャットなどが含まれます。文章でのコミュニケーションのためにインターネットを利用する人びとの内、97.6% が電子メールを使い、そして 66.5% はチャットのためにインスタントメッセージを使い、一方、0.6% は他の目的で使います。文章でのコミュニケーションの利用は、単なるチャットから、プロジェクトや課題をオンライン上で議論するといったビジネス目的のものまで、さまざまです。ソーシャルネットワーキングについては、グラフの 5 でインターネットの利用者が使うさまざまなプログラムを示していますが、一番人気の高いオンライン・ソーシャル・ネットワークは Facebook（フェイスブック）です。世界インターネット統計によると、2011 年 6 月の時点で、マレーシアのフェイスブックの利用者は約 11,221,040 名でした。しかしながら、Skype（スカイプ）やその他の新しいオンライン・ソーシャル・ネットワークが登場すると、それまでのネットワークをやめて流行にのり、別に新たなアカウントをスタートさせる傾向にあります。したがって、データの正確性はこうしたことに強い影響を受け、この数年で大きく変動すると考えられます。こうしたオンライン・ソーシャル・ネットワークにより、利用者は写真、記事、ビデオ、ジョークを共有し、さらにはいっしょにオンラインゲームを楽しむこともできます。新しい友達ができるだけでなく、利用者は、遠く離れた友人や家族と連絡をとることもできるのです。最近では、こうした種類のオンライン・ソーシャル・ネットワークを通してイベントやパーティーを企画するという、新たなトレンドも生まれつつあります。中には、こうしたネットワークを使って、自分達の結婚式の招待状を送付する人までいるのです。



グラフ 4: インターネット利用目的の割合

(出典: <http://www.apira.org/data/upload/MicrosoftPowerPoint-HUIS2009Presentationat7thAPIRA>)



グラフ 5: ソーシャル・ネットワーキング/オンライン・コミュニティで使用されるプログラム

(出典: <http://www.apira.org/data/upload/MicrosoftPowerPoint-HUIS2009Presentationat7thAPIRA>)

マレーシアでインターネットによるコミュニケーションで使用される言語は、主に英語です。ただ、多民族国家であり、多言語によるコミュニケーションがインターネット上で行われることも珍しくはありません。マレーシアの国家としての公式言語はマレー語ですが、マレーシアの中国系やインド系の人びとが、インターネットでコミュニケーションをする際に、自分達の母語である中国語やヒンディー語を使うこともあります。また、より簡単に文章を打ったりコミュニケーションがとれるように、多くのインターネットの利用者は、言葉を短縮したり省略した新たな略語を作り始めています。こうした略語の意味は

若い世代のインターネットの利用者でなければ理解できません。また、コミュニケーションをとるにあたり、単語の代わりに顔文字を使って気持ちや考えを表現する人もいます。さらに、使用されている文章は、文法的に間違っていたりスペルが正しくないというケースがほとんどです。こうしたインターネット文化の登場は、マレーシアの学生の言語力に影響を及ぼす可能性がある問題と言えます。

最近、インターネットは、考えを広めたり運動を支持するための土台として活用されています。例えば、ある利用者が Facebook で動物虐待のビデオを見た場合、動物虐待に対するその利用者の反応が非常に強く、関係者に問題に対するしかるべき対応をとるよう影響を与える、ということもあるわけです。また、インターネットは、共通の目的にむかって共に活動するために、離れた場所にいる異なる人びと同士をつなぐ役目としても活用されています。

インターネットが私達の日々の生活に便利さをもたらしていることは、まづもって疑う余地のない事実です。また、インターネットにより、遠く離れた場所でもコミュニケーションをとることが可能となり、時間とお金の大きな節約となります。一方、残念ながら、じかに対面する機会が減ったり、なりすまし詐欺が起きるなどの問題が発生しています。サイバーセキュリティ・マレーシアのチーフ・エグゼクティブ・オフィサーであるダト・ハッサン・ジャズリ教授によると、サイバーセキュリティ・マレーシアでは、2011年の1月から9月までに、11,930件のサイバーセキュリティの問題を検出しました。4,175件は詐欺に関するもので、3,452件はスパム、2,345件はハッキング、867件は悪質コード、525件はハッキング未遂、354件はサイバーハラスメント、48件は違法コンテンツでした。2010年から130%の増加でした(ボナー・ポスト・オンライン、2011年10月12日(水)のニュース)。コンピュータースクリーンの向こう側の方が自分に自信が持てて安全だと感じ、ますます多くの利用者がインターネット中毒になり、バーチャルな生活に依存するようになる、と指摘するコメントもあります。結果的に、直接対面して人と付き合う時間が減少し、そのため、インターネットの利用者の実生活でのコミュニケーションスキルに影響が出るのではとの懸念もあります。しかしながら、こうした問題は、現時点ではまだ深刻ではありません。しかるべきコンセプトが利用者に教育されれば、インターネットは、なんらかの障害となるのではなく、人びとのコミュニケーションを高める非常に便利で有益なツールとなるはずです。

インターネットを使ったコミュニケーションは、友達の作り方という点で若者によくない、と主張する人も大勢いました。確かに、インターネットの利用者の多くがバーチャルな世界で友達を作っていますし、なりすまし詐欺にだまされる危険もあります。しかしながら、最近では、自分の写真を添えて経歴を示すことを利用者に求めるオンライン・ソーシャル・ネットワークも増えており、インスタントメッセージがトレンドの中心であった

時代に比べると、なりすまし詐欺が減少しているという改善点も見られます。

インターネットを使ったコミュニケーションにより、私達の生活が非常に便利になったのは確かです。留学生から見ると、インターネットのおかげで、友人や家族と頻繁にコミュニケーションをとることができるようになりました。というのも、インターネットなら、非常に安く、手軽に、速く、連絡を取ることができるからです。また、オンラインで写真を共有すれば、海外にいる人が最近どうしているか、その様子を知らせることも可能です。こうしたことは、異国の地に到着したばかりで友達もいない留学生にとって、孤独を癒す上で非常に重要です。私の個人的な体験からすると、インターネットでのコミュニケーションは、3月11日の東日本大震災のような緊急事態が起きた際、家族や友人と連絡を取る上で非常に有効でした。震災の時、電話などの遠距離通信システムが一時的にダウンしたのです。また、卒業してから以前のクラスメートと連絡を取っておらず、結局そのまま二度と連絡をとることもまずなさそうだと、いう人も多いでしょう。インターネットを使えば、現在の居場所や最近の様子を知ることができます。先生や講師と連絡をとるのにインターネットを使う人もいるくらいです。どんな新発明であれ、最も重要なのはその使い方です。人びとがインターネットを誤って使わない限り、インターネットが私達の生活にもたらす利益はその弊害よりもはるかに大きいのです。